

問いかけ続けるストーリー

康陽球

研究テーマと私の予想

人類学に携わる者は、フィールドでの出会いを通して、多かれ少なかれ自分の中にある常識や前提が揺らいだり、ぼんやりとあった問題意識がくっきりと明らかになったり、そんな経験をする事だろう。私も調査の過程で、心打たれる出会いを経験した。しかし、その出会いがなぜ私の心を打ったのか。それを考えられるようになるまで、ずいぶんと時間がかかった。私は長い間、自分自身の常識や前提が揺らいでいることを認められなかったし、設定した問いがなぜ自分自身にとって重要なのかを考えてこなかった。自分と近い境遇にある人々を調査対象にしたことで、調査する前から彼ら彼女らを理解したつもりになっていたのかもしれない。あるいは、自分の中にある答えが揺らぐことを恐れていたのかもしれない。調査を終えて二年が過ぎたが、今でも私は、調査の過程で出会った人々が教えてくれたこと、伝えてくれたことが何だったのかを考え続けている。そしてようやく最近、話しを聞かせてくれた人々を理解したつもりになっているという奢りや自分の中の答えが揺らぐことへの恐れに、少しずつ向き合えるようになっていく。

修士課程における私の研究テーマは、「在日コリアンと日本人の結婚」だった。研究計画書に書いた私の当初の問題意識は次のようなものだった。在日コリアンとは、戦前、または終戦直後の混乱期に朝鮮半島や済州島から日本に渡って来た人々とその子孫を指す。日本に住む半数以上の韓国・朝鮮人は日本で生まれ育ち、日本人と変わらない生活を送っている。日本国籍の人も増加している。それでも、在日コリアンと日本人の結婚は、両親をはじめとした周囲の人々から反対されることが少なくない。それは決して遠い昔の出来事ではない。三世、四世と言われる私の友人たちを見渡しても、そのような経験をしている人は一人、二人ではない。多くの先行研究が、互いの結婚への忌避感の根強さを指摘し、その理由として、歴史認識の違いや、偏見、経済力や、文化の違いなどを挙げている。

しかしいずれの研究も、在日コリアンと日本人の結婚に障害が多いということを強調するばかりで、結婚生活が実際どのように営まれているのかに関してはほとんどふれていない。私は、年々増加し続ける在日コリアンと日本人の夫婦が、どのような生活を送っているのかを知りたいと思った。そして、結婚生活のどのような場面で在日コリアンであることや、日本人であること、そして在日コリアンと日本人の結婚が特殊であることを思い知らされるのか、それを明らかにしたいと考えた。その経験を整理・分析することで、互いの忌避感や困難な部分ばかりが強調されるこの結婚を、冷静に見つめなおすことができると考えた。これが、私が当初掲げた研究の狙いであった。

私の大方の予想は、両親からの反対、役所での手続き、慣習の違い、子どもの教育な

どにおいて多少の齟齬や対立があっても、それを民族の違いと考えることなく生活を送っているのではないかというものだった。そうでなくては夫婦関係を続けるのは難しいはずだ。そう安易に考えていた。そして、そのような証言をしてくれる人に出会えることを、どこかで期待していた。しかし結果、そういった予想から大きく外れるストーリーに、私は惹かれることになる。

あるご夫婦との出会い

ある60代のご夫婦に話しを聞かせてもらった時のことだった。私の研究テーマを知った知人が、知り合いの在日コリアン男性と日本人女性の夫婦を紹介してくれた。それが、この二人だった。二人の住まいの近くにある小さなセルフサービスの喫茶店の隅で、私は話しを聞きはじめた。二人の結婚までの道りは壮絶なものだった。女性の母親は結婚を反対し自殺未遂をしたと言う。男性は女性の父親と帰化をすると約束しそれを実行したと話してくれた。結婚後も二人は「植民地主義の加害者である日本人」として、「日本社会において被抑圧的な立場にいる在日コリアン」として、どのように生きるべきなのかを真剣に考え抜いて様々な選択をしてきたと話した。

妻である女性は、「そんなことを考える必要はないだろうと、今の若い人たちは笑うだろう」と言った。しかし、「在日二世と結婚した私なりの理屈があった」と繰り返した。彼女は、ある文書を読んで、自身が幼い頃、朝鮮半島で収穫された米を食べたことで生き延びたことと、それによって多くの朝鮮人の子どもが亡くなったことを知ったと言う。「過去、私が生まれる以前、私にはあずかり知れない、ある意味なんの責任もない歴史かもしれないけれど、絶対無関係ではないんだっていう根本が私のなかにはある」と言った。そして、それが夫と向き合う上での立ち位置だったと語った。

一方、夫である男性は、在日コリアンであることを隠して生きる自身の兄や、それを黙って見守り続けた母について語った。そして、そのような彼の家族の生き方が、「加害者」という立場を貫く妻を苦しめてきたと思っていたことを話した。そしてそのような認識が、彼が展開する文化活動の原点になっていることを語った。彼は長い時間をかけて、兄がとった行動や母に起こった出来事を、細やかに描写した。途中で私は、何も聞けなくなってしまう。妻である女性が史実を知った時の衝撃や覚悟、夫である男性が母や兄に感じるとる哀しみが、私の中に侵入してくるようだった。

調査者として、聞き手として、二人が語ることの背景に、二人なりのどのような理屈があるのか、それを理解するのが私の目的であるはずだった。そのための質問を用意していたつもりだった。しかし、それはうまく行かなかった。感情だけが押し寄せてきた。何のために私はこの人たちに語らせているのか。そんな気持ちが湧き上がった。押し黙る私に、それでも二人は語り続けてくれた。



写真1 私が通っていた街の真ん中を流れる川。川沿いに住む人が鉢植えを並べている。インタビューに答えてくれた女性の家も、この川沿いにあった。

狙いとは異なるストーリー

このインタビューで、私の当初の狙いは外れた。私は、在日コリアンであることや、日本人であることにとらわれない人々の話を聞こうとしていたはずだったが、それとは異なるストーリーを聞くことになった。同時に、私はインタビュアーであり続けることにも失敗した。ただ、二人とともに過ごした時間は、いつまでも私の記憶に張りついた。そしてその後、他の二人のインタビューでも、同じような経験をした。一人目は50代の女性だった。自治体が主催する国際交流イベントに参加していた彼女に、私が話しかけたことがきっかけで知り合った。もう一人は、知人の紹介で知り合った同じく50代の女性で、偶然にも、イベントで出会った女性の友人だった。

一人目の女性に話を聞くために、私は彼女の自宅を訪ねた。そのとき彼女は不調を抱えていた。介護を続けていた義父の死、子どもの離婚、夫の入院などが重なっていた。それでも彼女は私の申し入れを快く受け入れてくれた。キッチンの傍にある丸いテーブルを挟んで座った。彼女は服の修繕を手もとで続けていた。彼女はやがて、義母に結婚を激しく反対されたこと、それをきっかけに「日本人としての責任」を果たすことに努めてきたということ話しはじめた。

彼女は、日本人である自分に向けられる義母の憎しみがどれほど激しいものだったのかを私に話した。妊娠中の彼女のもとに、義母は産婦人科医を連れてきて、中絶を迫っ

たこともあったと言う。義父母との交流をきっかけに自分自身が「日本人」であることを意識するようになった彼女は、在日コリアン集住地に移り住み、朝鮮の言葉や料理を学んだと語った。義父の介護を続け、義父の死後は義母の家に住み込み、四十九日まで続く弔いの儀式的準備をすべてやったと話した。そして、苛立ちと愛着が入り混じった義母にもつ不思議な感情を、彼女は義母の微笑む写真を見つめながら語ってくれた。そして、在日コリアンと向き合うことのしんどさを話してくれた。若い頃の恋愛話にも花が咲いた。

インタビューの場所となった彼女の自宅は、なぜか懐かしい匂いがして、とても落ち着いていた。それまでのインタビューでは、日本人である女性たちが、在日コリアンである私に配慮してか、話したいことを話さずにいると感じることも少なくなかった。そんな壁を軽く飛び越えるような彼女の語りかけや表情に、私は興奮と心地よさを感じた。

私のなかの揺らぎ

二人目の女性は、亡き夫との思い出や、子どもたちの抱える苦勞について語ってくれた。大学で在日コリアンの学生に「日本人としての責任」を迫られた苦い経験、そんなことを気にする必要がないと彼女に生きる道を示してくれた夫との出会い、中学卒業後ずっと働き続けながら社会運動に従事してきた夫のめまぐるしい人生を、彼女はつぶさに語った。彼女と夫は、子どもたちに「民族名」と呼ばれる、朝鮮人であることがわかる名前をつけ、それを使って生活させていたと教えてくれた。彼女は、日本人である彼女と、民族名を名乗る子どもたちとの間に、緊張感の違いがあると言う。

一時は彼女も民族名を名乗ろうと考えたが、そうはしなかったと振り返る。「私は当事者ではない。当事者性というものを常に考えていた」と彼女は話した。そんな「真面目な話し」をしながらも、彼女は、料理を教えてくれた一世の兄嫁や、面白い昔話を聞かせてくれる「不良」の義父との思い出を楽しそうに語ってくれた。彼女はやがて、私が誰にも打ち明けることのなかった悩みや迷い、葛藤を見事に引き出した。率直に話す彼女を前にして、打ち明けざるを得なくなったといったほうがいいのかもかもしれない。彼女の自宅での五時間に及ぶ対話の末、涙と鼻水をぬぐった箱のティッシュは底をつき、私は翌日まで頭痛に苦しんだ。

この三つの印象的なインタビューは、いつまでも私の心に残った。そして私は、彼女たちのストーリーを論文に書き記さずにはいられなかった。しかし私は、彼女たちのストーリーを論文としてまとめ上げることに失敗し続けている。それはきっと、私が、彼女たちのストーリーに惹かれたわけをずっと考えないままでいたからだと思う。冒頭で述べたとおり、私は、自分の前提が揺らいでいることを認めなかったし、設定した問いがなぜ自分にとって重要なのかを考えてこなかった。考えることを避けていた。しかし、時間をかけて、彼女たちが語ったことを読み返し、彼女たちとともに過ごした時間を思い起こすことで、かすかにではあるが、私は何を明らかにしようとしていたのか、私の

中の何が揺らいだのかがわかりはじめた。



写真2 文中に出てくる男性が立ち上げた文化活動の練習風景。チャンゴとブツと呼ばれる朝鮮の太鼓を叩いている。活動は、国籍や出身地、年齢や性別、障害の有無、スキルを問わず様々な人が自由に参加することを理念にしている。

聞き手と話し手の境界を融解する感覚

インタビュー中、彼女たちの語りかけは、聞き手と話し手の境界を融解するような感覚に私を誘った。それは、彼女たちの生き方に、私が深い驚きと共感を覚えたからであると思う。彼女たちは、在日コリアンであること、日本人であることを考えずにはいられなかった。そんな彼女たちのストーリーに、私は惹きつけられた。それは、私自身も、在日コリアンであることから逃れられずにいたからであった。私はそれに気づくまで長い時間がかかった。彼女たちのストーリーが、私の生き方にも通じるということ、私はなかなか認めることができなかった。なぜなら、彼女たちの生き方は、私が目を背け、距離を置き、理解することを拒んできた生き方であったからである。

在日コリアンが在日コリアンであることを突きつけられるのは、否定的な文脈であることが多い。それを克服するために、在日コリアンであることに誇りをもつことが掲げられた時代に、私は生まれ育った。だが、いずれにしても「民族」は私を縛るものだった

た。そのようなものから解放されて生きるべきだと思っていた。その考えは今も変わっていない。しかしそれは簡単なことではない。もがいている私に、彼女たちのストーリーは、在日コリアンであることに引っ張られてしまう気持ちも、それに反発する気持ちも、そのまま抱えて生きていけばいいのだと語りかけているようであった。

彼女たちのストーリーと私の「民族」への向き合い方

それに気づいたとき、やっと私は、自分の奥底にあった問題意識と、彼女たちのストーリーを結びつけることができた。ストーリーは、彼女たちがとった選択や行動が、大げさな大義だけに基づくものではないと語る。彼女たちが経験した一つ一つの出会いや出来事、人々との関わり合いの積み重ねが彼女たちのとった選択や立場を裏打ちしていることを語る。私には、その一つ一つが、「民族」という大きな物語に引き込まれそうになりながらも、その手前でとどまっているかのように映る。そんな彼女たちのストーリーが私の「民族」への向き合い方を揺るがした。

「民族」というものは、少なくとも私にとっては、とても面倒で、向き合うのがしんどいものである。社会にはびこる様々な暴力が、在日コリアンや在日コリアンと関わる人々を、「民族」に向き合わざるを得ない状況に追い込んでいる。しかし、そのような状況が、あるいはその状況に抵抗するという使命感だけが、私を「民族」から逃れさせないのではない。幼い頃の記憶や、人々との出会いや関わり、経験した出来事、偶然とも言える一つ一つのことが、私を「民族」というものへと向かわせる。それがなぜなのか、今後考えていくこともできるだろう。ただ、今わかっているのは、「民族」に縛られることから逃れるために、そういった経験や記憶や人々との関係までをも否定する必要はないと、彼女たちのストーリーが教えてくれたということだ。そしてまず、彼女たちのそのような態度を作り上げた一つ一つの出会いや出来事を書き記していくことから始めたい。そう思っている。